崇徳学園新聞

広島市西区横川新町7番1号
崇徳高等学校（中学校併設）　新聞部（しんぶんぶ）
発行人　丸　照正
編集者　植田　健陽　柴田　洋　新谷　優之介　渡元　晴輝

～法語～

自分の人生を自分で決めるということはどういうことか。それは自分の心に打ち勝つということです

アウン・サン・スー・チー

8つのクラブが全国へ

全国高等学校総合体育大会 南東北総体2017

全国高等学校総合文化祭 みやぎ総文2017

7月12日（水）平成29年度全国高等学校総合体育大会（通称「南東北総体2017」）ならびに第41回全国高等学校総合文化祭（みやぎ総文2017）などの全国大会へ向けての壮行式が行われた。南東北総体への参加が決まっているのは自転車競技部、バレーボール部、弓道部、ボクシング部、柔道部、体操競技部の6つのクラブで計65名。みやぎ総文への参加が決まっているのはグリークラブ、新聞部の2つで32名となっている。出場選手を代表して柔道部の長岡孝空さんが、全校に向かって全国大会への意気込みを語った。（4・5面に関連記事）

部説

「異常が日常」？

異常気象。今や週に一度は必ずテレビや新聞などに登場するフレーズとなった「ゲリラ豪雨」や「記録的大雨」、「スーパー猛暑」などといったいかめしい表現のインフレーションもここに極まりつつある。

「常」ではないからこそ「異常」として報道する価値が生まれる。しかし、この異常が年に1回から月に1回に、週に1回から毎日に、と頻度が高くなったらそれはもう「異常」ではなく「常」になっていると言えよう。現に「50年に1度」の雨量で発令される「大雨特別警報」は、制定された13年以降の4年間で既に6度も発令された。50年どころか8ヶ月に1度の頻度だ。

先日全校で鑑賞した映画「この世界の片隅に」では何度か空襲警報が鳴る場面がある。最初はそのたびに火を確認したり戸を外したりと緊張感を持って対応するシーンが描かれていた。日常生活の中に「戦争」という「常ならぬもの」が入り込み、いつもと違う「異常」が描かれていたわけだ。しかし、戦争も終盤になったころには空襲警報が鳴っても寝たままだったり、どうせ空襲警報は空振り、と思い込んでいるシーンもある。戦争が激化していく中で、最初は「異常」だったものが知らぬ間に「日常」へと変化することはよくあることのようだ。

オバマ氏の来広から1年。日本は現在、核の脅威にさらされている。北朝鮮のミサイル問題だ。今年に入って実に10回もの実験が行われている。本来あるべきでない状態にもかかわらず「またか」と思ってしまったとき、それはすでに「異常」が「日常」に変わってしまっているサインとも言える。

雨雲レーダーを眺めて「警報休校」を期待してしまったり、定期考査の点が悪かったことに諦めてしまったり、携帯所持やシャツ出しなどのルール違反を「みんなもやっている」「そんなものだ」としか思えなくなるのは虚しい。

大切なのは他の人が何をしているかではない。「異常」なことを「異常」なままで捉えられる「異常」な人でいるのも悪くないはずだ。（T・M）

新生徒会☆発足1ヶ月

計画色々

他校と交流!?・自主ボランティア活動!?・靴の色選択可!?

6月14日に投票がおこなわれた本年度の生徒会役員選挙により選ばれた新生徒会執行部。発足からひと月余り経過し、具体的な方針や活動の方向も定まりつつある。就任してみての意気込みやこれまで1ヶ月の成果、今後の展望について会長、副会長、会計の三役にそれぞれ話を聞いた。

生徒会長の新谷優之介さんは「今まで生徒会活動に加え、崇徳生全体を巻き込むようなこと、例えば他校との交流やボランティア活動などを始めたい」と目標を語る。「ちなみに今年の崇徳祭はライブを開催するなどしたい」と計画を明かした。また公約の目安箱も設置が決定。図書室など3カ所に順次設置されることになったが「まだ増やしたいと考えている」とのこと。「現状に満足せず、崇徳をより良くしたい」との思いで取り組む。

副会長の中村健浩さんは「目安箱を活用し、靴の色のルールなど、生徒が疑問に思っていることを確認し、意見に沿って改善したい。今年から執行部に入ったので、周りと協力し、公約を実現したい」と語る。「皆さんの役に立てるよう、一生懸命に頑張り努力したい」と話した。

同じく副会長の藤澤翔さんは「生徒会のシステムを簡略化し、他のことに手を回すための余裕を作りたい」と語り、二副会長として会長の補佐を「最後まで皆さんの役に立てるように頑張る」と決意を口にした。岩崎誠さんは「執行部の役員としてたくさんの仕事に携わることで、生徒が学校生活を楽しく過ごせるように全力を尽くす」と話した。

会計の赤松大樹さんは「自分の力を役に立てるように頑張りたい」と意気込む。

平成29年度 新生徒会執行部
左から（岩崎・藤澤・新谷・中村・赤松）

49年ぶり!?

本紙224号は8面紙、表に84号（昭和43年8月発行）以来49年ぶりとなる。「異数が多ければよいというものではないが、少しでも楽しんで読んでもらえたら」と丸尾立部長は語る。

NEWS 224

◆夏・全国大会へ
新生徒会発足　1面
◆世代の新リーダー　2面
◆新校舎、ついにお披露目　3面
◆特集
「第70回総体」　4,5面
「この世界の片隅に」　6,7面
◆広島土砂災害から3年
「線状降水帯」と
「バックビルディング」　8面

夏の全国大会 日程・会場

●自転車競技部：7月26～30日（いわき市勿来海岸、石川町・浅川町周回特設コース）●バレーボール部：7月29日～8月1日（山形市総合スポーツセンター他）●柔道部：8月1～4日（仙台市立体育館）●ボクシング部：8月4～10日（あいづ総合体育館）●柔道部：8月8～10日（郡山総合体育館）●体操競技部：8月12～14日（金沢市国技館記念体育館）●グリークラブ：8月31～35日（三原エレクトロンホール宮城）●新聞部：7月31～8月3日（東京エレクトロンホール宮城、せんだいメディアテーク）

明暗

部活動も終わり、あくまで体制がスタートした。引退した3年生はこれまで部活動に使っていた時間もこれから自由に使える▼時間があれば、有益なことを実行することが出来る。しかし何が有益なのかは人によって違う。残念ながら「自分にとって有益なこと」の多くは自分の欲望を満たすことである場合が多い▼卒業したとある先輩は部活動という枠がなくなったことで帰宅後は娯楽に明け暮れて、休日は寝るか食事をするかといった無駄に不規則な生活を定着してしまったという。受験が終わり、ふと我に返ったときに「もっと勉強するべきだった」と嘆いたそうだ▼娯楽や寝ることがいけないとは言わない。それらのONOFFの切り替えが大切だ。部活引退後の空き時間をそのまま勉強時間に置き換えれば「有益な」時間となろう。彼望に身を任せる習慣をつけるべきではなく勉強を習慣づける意識を持てた人は理想的だ▼先日の期末考査前期中の休校ではみんな学校に時間を確保したが、その時限をテスト対策にあてた人もいます。自分の時間の使い方が有益だったか無益だったかが分かるのは自分の人生がもっと進んでからだろう▼タイム イズ マネーを出発に「タイム イズ ライフ」を築った先生がいる。時間は人生と結びついている。一度きりの人生だ。限りある時間を後悔しないよう使いたい。（T・H）

6つのクラブが南東北インターハイへ出場決定

躍動

2017年度第70◎広島県高等学校総合体育大会

若人の体育祭典

ボクシング部 4階級制覇

県総体で4階級を制し、中国総体でウエルター級を入偉心太さんが制したことで勝れて4名でインターハイへ。

▽ビン級青川裕馬2位▽ライトフライ級場坪夢1位▽ライト級源2位▽フライ級係坂瑞紀1位▽バンタム級松浦成吾3位▽バンタム級梶原武蔵1位▽ライト級大野新真2位▽中量級3▽ライトウエルター級位尾花法3位▽ウエルター級2▽ウエルター級入澤心太1位▽学校対抗の部第40点1位

自転車競技部

部員数0人から始まった3年生の挑戦がいよいよクライマックスへ。黒瀬が県総体大会新を連発したことで影に隠れてしまってはいるが、2年生など後輩も頼もしく成長。4人の代表がインターハイで伝説をつくる。

▽1kmタイムトライアル黒瀬浩太郎1分07秒42 1位▽大会新▽白井イントレー高津尚弥51点 1位▽尾瀬宗一郎2点 7位▽田丸祥之介0点8位▽スクラッチ大久保俊祐14分45秒87 1位▽島津尚弥3位▽尾瀬宗一郎7位▽ケイリン大久保俊規2位▽個人ロードレース島津尚弥2時間36分45秒1位▽マラソン尾瀬宗一郎 6位▽ポイントレース島津尚弥51点 1位▽尾瀬宗一郎2点 7位▽田丸祥之介0点8位▽スクラッチ大久保俊祐14分45秒87 1位▽島津尚弥3位▽尾瀬宗一郎7位▽ケイリン大久保俊規2位▽個人ロードレース島津尚弥2時間36分45秒1位▽マラソン尾瀬宗一郎 6位▽ポ

4km速度競走黒瀬浩太郎5分09秒90 1位▽尾瀬宗一郎 6位▽ポイントレース島津尚弥51点 1位▽尾瀬宗一郎2点 7位▽田丸祥之介0点8位▽スクラッチ大久保俊祐14分45秒87 1位▽島津尚弥3位▽尾瀬宗一郎7位▽ケイリン大久保俊規2位▽個人ロードレース島津尚弥2時間36分45秒1位▽マラソン

国泰寺撃破で準決勝進出

崇徳学園新聞
速報版
～発行者～
崇徳高校新聞部

相手ディフェンスにひるまず、果敢にゴールを狙う

インターハイ 夢舞台まであと2勝

6月4日(日)、呉市総合スポーツセンター陸上競技場において第70回広島県高等学校総合体育大会サッカーの部、第3回戦が行われた。相手は国泰寺高校。結果は1―0で勝利。準決勝へ駒を進めた。

本校サッカー部は初戦、対福山葦陽を2―1で勝利。2回戦の対基町を4―0で撃破するなど順調に勝ち進んでいた。

対国泰寺戦は13時30分にキックオフ。保護者も多数つめかけ声援を送る。

崇徳優勢で試合をすすめ、チャンスを作るもシュートが打てず、前半が終了。

後半20分程が経過し、ついに均衡が破れる。崇徳がゴール前でショートパスをつなぎ、相手のディフェンスを崩したところで高校1年生背番号30敢近がシュート。これが崇徳の先制点となった。

こうなれば試合の流れは崇徳に。守護神中西を中心にこの1点を守り抜きタイムアップ。見事国泰寺高校に勝利した。

藤間の木村先生は準決勝に向けて「自分たちの力を100％出す。スーパースターはチームにはいない。1人でも欠けたらだめ。優勝したい」と選手に期待する。また「試合を意識してやる。練習からこれ出来ないことは試合でもできない」と話した。

サッカー部の小川裕也さん（2―14）は「試合には出られなかったけど、勝ってよかった。この勢いでチーム一丸となって勝ちに行きたい」と応援にも熱が入る。

昨年はあと一歩のところで逃したインターハイ。今年こそはと期待がかかる。白い歯が輝く日まであと2勝だ。

準決勝組み合わせ

6月10日も県総体

運動部を応援に行こう！

準決勝

対 瀬戸内高校

6月10日(土)

広島広域公園第一球技場

13：30

キックオフ

あと1本あと1勝届かぬ夢

剣道部 団体

準優勝

崇徳学園新聞
速報版
～発行者～
崇徳高校新聞部

延長までもつれた大将戦で果敢な攻める久保選手（左）

快勝で決勝へ

大会は崇徳の流れで進んだが…

初戦から4―1広島県船4―0広陵と撃破し、準決勝では皆実を3―0で下した崇徳剣道部。今年の県総体を圧勝で勝ち上がり、リズムに乗り「崇徳強し」の流れになりかけていた大会の流れに水を差したのはまさかの「女子決勝」だったのかも知れない。

男子決勝の前に行われた女子決勝、翔岸―府田の一戦は次鋒戦以降代表戦までが全て延長までもつれ込み、剣道にしては異例の1時間にもわたる大熱戦となった。息詰まる戦に審判も選手も慣れになり、最後の代表戦を制した翔岸がインターハイの切符を手にした。

その1時間の間じっと待った崇徳と、必死で応援し一緒に汗を流した女子の傷しさを胸に刻んだ府田。気まぐれな運命の女神が味方したのは後者だった。

＊　＊　＊　＊

インターハイをかけた男子団体決勝戦は県総体3連覇中の昭和と、呉新人戦を制し全国選抜に出場した銀

流れ変えた！女子決勝

（中央列左から）井上、藤井、大地、岡本、久保で臨んだ決勝
（後列左から）広田先生、正平、森岡、中本、須山先生が見守る

徳の戦いとなった。次鋒の藤井選手が1本取った。

たものの副将の岡本選手が取り返され、1―1で迎えた大将戦。長々と続いた女子決勝の影響か、言葉もなかなか有効打を認めない。元顧問の岩田先生は「面」以外で1本が取れない緊迫した異様な空気が会場を包んでいた」と指摘する。府田の大将久保選手に敗った面が1本となり、悲願の団体優勝は夢と消えた。

特進コースと運動部

文武「両立」の悩みを越えて

3―11　森岡大貴さん

勝負が決まり、準優勝に終わった剣道部。試合直後に泣き崩れる選手達を支えたのは補欠選手として登録されていた3年11組の森岡大貴さん。森岡さんは国公立大進学希望の選択コースに在籍。平日は他コースと違い毎日7限まで授業が課され、その後に補習があることもしばしば。土日や春夏冬の長期休業には強制補習や模擬試験への参加も義務づけられ、練習への参加はどうしても遅れがち。最後になった県総体も補欠として挑んだ。「特進じゃなければ…」と思ったことがないといえば嘘になる。しかし自らが決めた道、結果にこだわらず、必ずやり遂げるとあめていた。

高校最後の総体も舞台に上がることは出来なかったが「選手達はみんなよく頑張った。悔いは無い」とキッパリ。夫週の個人戦や中部総体でも出番はないがしっかり応援するため「受験に専念するのは月末から」とのこと。

「でも、インターハイ、行きたかった！」という森岡さんの顔には、やりきった人にだけ許された爽やかな笑顔があった。

「選手はみんなよくやった」

剣道部顧問の広田先生は「（この結果は）大将戦までもつれ込ませた自分の責任。生徒たちは本当に懸命によく戦った」と愛弟子達の活躍を称えた。

個人戦5階級制覇

2年ぶりの全階級制覇ならず

崇徳学園新聞
速報版
～発行者～
崇徳高校新聞部

「崇徳強し」を改めて印象づける試合が随所で見られた

100kg超級 長岡季空

100kg超級を制した今キャプテン長岡選手は「今は優勝できてほっとしている。このまま個人・団体両方の部でも日本一を目指したい」と語る。「そのため

100kg級 神垣和他

100kg級は13人の出場者中8名が崇徳柔道部。そめにも技をかけたり、メンタル面の弱さ、攻めが出来ないという県総体での反省点を残り1ヶ月で鍛え、それ以上のものを全国でぶつけたい」と笑顔で語った。

の熾烈な争いを制し全国に挑む神垣選手は「県総体で優勝したからには他の選手の分まで全国で頑張らないといけない」と部員達の思いが自分が背負っていることを充分自覚している。県総体3戦全てが崇徳生との勝負で「崇徳生と何回もあたり、やりづらかったが試合中はみんな敵、気は遣わなかった」とキッパリ。

今は家を離れ、寮での生活している神垣さん「家族の分までやっている。戦には送迎をかけた」。家族や仲間の夢キツイ練習をどんどんこなしていく」と目標を語った。

柔道競技会場

6月3日に広島県立総合体育館（広島グリーンアリーナ近く）で第70回広島県立総合体育大会柔道個人の部が行なわれた。崇徳からは、全階級合わせて、35名の選手が出場し、そのうち60kg級・66kg級・90kg級・100kg超級で計5人の若者が崇徳の名を背負い全国に出場することが決定した。

90kg級 枇杷木勇樹

90kg級を制した枇杷木選手は「県総体優勝の勢いで個人や団体で日本一を取り

66kg級 緑 恵渡

寮での生活や柔道を通じ、家のありがたみや勝ちだけが全てではないことを学んだという66kg級優勝者緑選手。「春の選手権では負けてしまったので、初めての全国大会で自分らしい柔道をしたい」と意気込んだ。「今大会ではスタミナ切れや力負けが多く目立った。IHまでの残り時間で、試合でスタミナが切れないように

60kg級 出口嘉人

60kg級で県総体を優勝し、日本一までの第一歩を踏み出した出口選手。「県総体を優勝できて今は正直ほっとしている。県総体でのー番の山場は崇徳生とあたったときだった。後悔だったので絶対に負けないという思いで勝負に挑んだ。全国で優勝を目指し、残り少ない時間を工夫して柔道に挑みたい」とIHでの活躍を誓う。

監督 加美富幸先生

「崇徳生同士の試合も多かった今回の県総体だが、県大会個人戦には35人出場した本校柔道部員。強豪校ならではの強みと悩みが出た戦に挑んだ。

100kg級に出場した田頭さんのお母さんは「崇徳同士のつぶし合いは見ていて辛い。崇徳で勝ち残れなければ全国には行けない」とはいえそんなハイレベルで日々練習できる環境にあることはありがたく思う」と複雑な表情を浮かべる。子どもの頃から体が大きかったのがきっかけで柔道を始めたという田頭さん。「昨年1年は怪我で苦しんだ。厳しいかも知れないが自分が選んだ道、納得できるよう先輩の後を追いかけて欲しい」と願う。またそばにいた保護者からは「柔道を通じて自立ができた」「一日一日を大切に

強豪校ならではの強み・思い・悩み

今までの研究の成果も確かめられたという加美先生。しかし悔しい残っている。今回得られた改善点を克服して本戦に挑みたい。本戦では県総体以上の力を発揮したい」と語った。インターハイ会場は福島郡山。南東北で柔道部の強み、「中学生との違いを痛感した」「いつもと違う先輩たちが格好良かった」「自分も先輩みたいになりたい」。インターハイへの系譜はこうして引き継がれる。

し、自分を信じてベストを尽くしてくれると信じるだけ」というような笑顔と共に寄せられた。

＊＊＊＊

73kg級で3位に終わった神頭琴さんは準決勝で崇徳で同級生の岡恵人さんに敗れた。「まだまだ出来ることはある。今の思いは悔しさ100%」とうなだれた。岡さんも決勝で近大福山の松山選手に惜敗。2人とも来年こそ全国への思いは強い。神頭さんは「来年は俺が優勝します」と誓った。

＊＊＊＊

中学生が高校生の所躍を目の前で見られるのも本校柔道部の強み。「中学生との違いを痛感した」「いつもと違う先輩たちが格好良かった」「自分も先輩みたいになりたい」。インターハイへの系譜はこうして引き継がれる。

2年振り54度目V

崇徳学園新聞
速報版
～発行者～
崇徳高校新聞部

バレーボール県総体

ミス目立つも地力の差見せつける

神辺旭との決勝戦　気迫で流れを引き寄せる

6月10日に行われた広島県総合体育大会バレーボール部の部で本校バレーボール部は準決勝で安西高校、決勝戦で神辺旭高校をそれぞれストレートで破り、2年振り54回目の優勝を果たした。

キャプテンの真柄さんは「全国大会へのスタートラインに立つことができてよかった。しかし『崇徳のバレー』が今日はあまりできなかった。広島県内で一番強い＝崇徳というプレッシャーがあった。決勝の神辺旭に20点も取られるとは思ってなかったので、これから修正してミスをなくしたい」と振り返る。「これからは全国に向けての練習をしていく。レシーブ・トススパイクのコンビネーションを崩れないように練習したり、サーブレシーブを確実にするなど、まだまだ課題はある」と意気込む。

「ルーティーンは試合前日に全員でホテルに泊まること、ホテルでのミーティングで団結力を最大限まで高める」と語った。

昨年は決勝で広島工大高にまさかの敗北。インターハイを逃した。マネージャーの亀本さんは「昨年の雪辱を晴らすことができてよかった」と微笑む。「今回は高山が足を負傷してしまったが、それをカバーするようにチーム全員の団結力が上がった」と振り返る。「今後は、インターハイまでの練習試合を通して試合ごとに強くなっていってほしい」と期待する。

今年こそ全国制覇だ

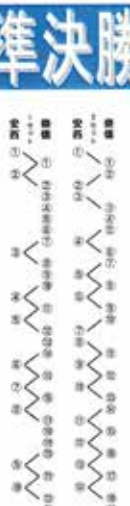
教育実習生の頃田先生は元バレー部。「実習中に県総体という大きな大会に協力できていい経験になった。自分は18日までいるので、しっかり選員をサポートしたい」と語った。

コーチである田村先生は「全国のスタートラインに立てたのは良かった。生徒たちもよく頑張ったと思う」と喜びを露わにした。「決勝で負けた1年前から、その時の悔しさを先生や生徒みんなで分かち合ってきた。お互いが悔しさを持って日々の練習をしてきた成果が今日出た。今からが本番」と熱い。「日々の練習は嘘をつかない。常に高い意識をもって練習してほしい。崇徳としてのプライドが、やがて自分の誇りになるはずだ」と選手の背中を押した。

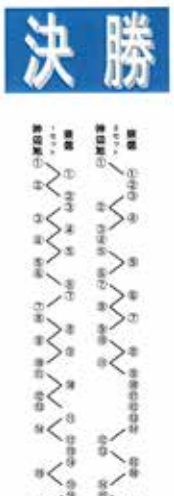
監督の本多先生は「試合の内容的には悪かったが勝ってよかった。『勝つことが全て』な試合だった。今日は自分たちのバレーが出来てなかったといういい経験をしたので、このことを活かしてインターハイで頑張ってほしい」と微笑む。「今日それぞれができなかった原因を突き止めて、インターハイでは『崇徳のバレー』ができるようにしたい。やがて自分の誇りになるはずだ」と選手の背中を押した。

応援団も力の源。
鈴江選手のお母さん「勝てて良かった。（新聞部も）今年は山形来るでしょ？（笑）」
→この時期、新聞部も全国大会です（涙）

準決勝



決勝



崇徳学園新聞
速報版
～発行者～
崇徳高校新聞部

バドミントン部

ダブルス ベスト8
シングルス ベスト16

やり切った個人戦

6月10日（1日目）はダブルス、シングルスが行われた。1回戦で三上・玉澤ペアは2－0と圧勝、中村・長尾ペアも同様ストレートで1回戦を突破した。しかし中村・長尾ペアは0－2で惜しくも2回戦敗退。また三上・玉澤ペアも続く3回戦で惜しくも1－2、健闘したものの県ベスト8で敗退となった。

これで全ペア敗退が決定し、本校バドミントン部は次のシングルスに気持ちを切り替えることとなった。

シングルスには三上さん、中村さん、玉澤さんが出場。1回戦は見事全員勝ち抜いたものの、2回戦で中村さんと玉澤さんが対戦したのは団体戦で優勝し2年連続インターハイに出場を決めた強豪城北高等学校の選手。惜敗も及ばず2人ともO－2とストレートで敗退した。三上さんは4回戦で尾道高校の選手と対戦。粘り強く戦ったがO－2で敗れた。この結果をふまえバドミントン部主将の山下さんは「シングルスでは強敵に立ち向かっていけたし、気持ちが入っていた。しかしダブルスでは体力面に関しては申し分ないが、球のスピードについていけなかった」と敗退の原因を分析した。

懸命にシャトルを打ち返す玉澤選手

『進化して行く』

今回の個人戦でシングルスとダブルスの両方を目の前で見ていたバドミントン部の松石コーチは「粘りとかねりを続けることが上手くなった。しかし攻撃面では決め球の弱さ、体力面での不安が残っていた。中国大会ではトップシングルスを中心に、トータルで勝ちを狙えるよう、強化に取り組んでいきたい」と意気込みを語った。

選手と個人戦

県総体ではシングルス、ダブルス両方に出場した玉澤さんは「最後まで諦めずにしっかり戦えた。強い相手と比べスピードは自分たちのほうが劣っていたので練習をしっかりしていきたい」と語る。

中村さんは「シングルスでは格上の相手にもついていけ、粘っこく自分らしいプレーが出来た。特に良かったのはネット前のプッシュ。ヘアピン勝負の時に積極的にプッシュが打てた。悪い所はラリー中に甘い球を打ってしまい決められてしまったので中国大会までに修正したい」と振り返る。

三上さんは「相手は苦しい場面でもミスが少なく自分とは違っていた。ずっと練習していたスマッシュなどの決め球が正確に決められたのはよかった」と分析。

ダブルスのみの出場だった長尾さんは「スマッシュがうまく打てた。初戦は少し緊張していたからいいプレーが出来ず、普段通りのプレーが出来なかった」と語り、中国大会へ向けて日々の練習に取り組もうとしていた。